◆2016年5月21日講義より

専業主婦から女性初の山形県知事になったわけ

20年の専業主婦生活を経て、山形県初、東北地方でも初の女性知事となった吉村美栄子さん。なぜ政治の道に入ったのか、政治家として何を目指しているのかを聞いた。

吉村美栄子さん

［プロフィール］　山形県生まれ。お茶の水女子大学文教育学部卒業。株式会社リクルートに勤務したのち結婚・出産によって山形に戻り専業主婦に。その間行政書士資格を取得。夫の死後、開業。そのかたわら市や県の審議会委員を歴任。2009年に山形県知事選に出馬。周囲の予想を覆し、第50代山形県知事に就任。2013年には無投票再選を果たす。現在2期目。現場主義、対話を重視する「あたたかい県政」が信条。

異色のキャリアが全国の女性の希望に

約20年間、専業主婦として子どもを育て、夫の死後、キャリアを再開。東北初の女性知事となった吉村美栄子さん。異色の経歴から、2010年の日経ウーマン主催の「ウーマン・オブ・ザ・イヤー」キャリアクリエイト部門を受賞。

「私のような人生の展開もあるということを知っていただくことで、全国の多くの皆様に、多様な可能性があるんだということを感じていただけたら嬉しい」と吉村さん。

吉村さんのキャリアは、大学卒業後、リクルート（現在のリクルートホールディングス）に就職したところから始まる。

「リクルートは『男女の区別はするが差別はしない』という大変ユニークな会社で、そこが気に入って入社したのです。先輩女性たちはそれまで見たこともないパワフルな方々ばかり。後に社長になった河野栄子さん、取締役になった神山陽子さん、そういう方々といっしょに働き、マンツーマンで仕事を教えてもらえたのは大変貴重な経験でした」

職業欄を埋められない悔しさがばねに

3年4カ月間勤め、その間に結婚。共働きをしていたが、妊娠8カ月のときに、義理の母が病気をしたこともあり、退職して山形に帰ることに。ところが夫は東京に残り、弁護士資格を取得してから帰郷したいという。司法試験に合格するまで別居することになった。

「その間、出産し行政書士の資格を取りました。長女はしっかりとお昼寝をしてくれる子でしたし両親もいますから、時間を持て余して仕方がなかったのです」

3年後、司法試験に合格した夫は山形に帰り弁護士として開業。家族そろっての生活が始まった。

「夫は、私が家で雪かきや子育てをしていると『君は肉体労働が似合うね』とか『僕は仕事で光り輝いていくけれど君はどんどん錆びついていくね』といちいち皮肉を言うのです。でも、それが私を鼓舞してくれました」

その夫は45歳の若さで他界する。義理の両親は、なんとか食べていけるから、無理して働かなくてもと言ってくれたが、「子どもの学習塾へ提出する書類に記入する保護者欄に、自分の名前は書いたけれど、職業欄に書くことが何もない。その空白を見ていると情けなくて、泣けて仕方がなかった」と吉村さん。

なんとかこの空欄を埋めてやると思い、派遣社員として働き始めた。このときに、派遣という立場の不安定さを実感したという。

その後、縁あって市の総合学習センターで、今度は非常勤職員として働き始める。2年ほど勤めたが義母が病気がちになり退職して家に戻ることに。「すると安心したのか義母の病気が治ってしまって。ただ家にいても退屈なので、行政書士を開業しました」

同時に、周囲から話があり、県の教育委員や、市や県の審議会の委員も引き受けた。

「女性の委員が少ないというので言われるままにいろいろ引き受けました。あとで知事になってから、このときの経験が役立ちました。県政にはあらゆる分野がありますから」

開業して10年が経った頃、県知事選に出馬しないかという話が舞い込んで来た。審議会委員やボランティアなど、いろいろな場で活動

する姿が、選挙関係者の目に留まったらしい。吉村さんが57歳のときのことだ。

「実は、政治家は好きな職業ではありませんでした。山形市長をしていた叔父が、当選するまで3回も落選し、12年間浪人生活をしているのを間近で見ていたからです。でも、『ほかに誰かいないのですか』と聞いたら、現職の知事に勝てるはずがないと言って、誰も出たがらないのだと。当時の知事の、福祉や農業を切り捨てる政策には賛同できませんでしたし、誰も出ないなら、じゃあ出るかと腹を決めました」

支えてくれたのは、家族、友人、山形県民のみなさん

最終決定に至るまでは、家族や友人にも意見を求めた。

「子どもに聞いたら、勝算ないならやめた方がいいと言う。姉は反対。義父に聞いたら、賛成だという。実は夫は政治家を志望していて、もし生きていたなら山形県知事になったのは夫だったかもしれないと地元の人たちから言われるほど将来を嘱望されていたのでした。義母に聞いたら、『この平和な生活を乱されたくないから反対だけど、みえちゃんが後悔するのは嫌だから自分で決めて』と。兄に聞いたら、『何もチャレンジしないで、そのまま人生を終えていいのか』と私をけしかけました。友人にも聞いたら『えー、もういっしょに温泉に行けなくなる』と（笑）」

いろいろな意見を聞いて、結局は「子どもに私の生きざまを見せたい」という思いが背中を押した。

「いざ立候補すると決まったら、反対をした人も、みんな一丸となって応援してくれました。とくに一番反対した義母が最大の応援者になってくれました。小学校の教師をしていた義母は、高齢にもかかわらず教え子の家を1軒1軒まわってくれました。病気をおして応援に来てくれた親戚の人、友人たち。私が当選できたのは、家族と山形県民のみなさんのおかげなんです」

「答えは現場にある」が信条

現在、女性知事は47都道府県の中でわずか2人。

吉村さんは、自分の強みを「育児も介護も経験し、長年の専業主婦生活で培ってきた市民感覚を大切にすること」だという。

慣習や前例にとらわれず、「常に県民目線で物事をとらえ、現場の人たちの気持ちを大切にしていく」と吉村さん。できるだけ現場に出かけ、現場の声を聴くよう心掛けている。

「現場に答えがある。対話を重ねることで、次の年のいろいろな施策を考える」

具体的には、人口減少を抑制する取り組みや、卒原発へ向けての再生可能エネルギーの取り組み、山形の特性を生かした産業振興、森林（モリ）ノミクス、地域再生などを精力的に進めている。

東日本大震災のときには、いち早く被災地に人的・物的支援を行い、避難者の受け入れを行った。瓦礫の受け入れも誰も手を挙げない中一番早く手を挙げた。

これらの政策が県民たちの支持を集め、2013年には、無投票で再選を勝ち取った。

生きたロールモデルでありたい

「私は毎日、県庁5階の知事室に階段を上り下りして通っています。そうしないとなかなか若い人たちに会えないからです。誰かに会えば必ず、自分から声をかけて挨拶をする。最初はほとんど挨拶が返ってくることはありませんでした。でも今は全員から声が返ってきますよ」

リクルートに勤めた頃、当時の江副浩正社長が、社員一人ひとりに声をかけていたことを覚えている。組織の風通しをよくすることは大事だと江副氏の背中に教えられた。

年度始めには、県庁の16階から地下まで、全ての部署をまわり、「今年度も、いっしょにがんばりましょうと」と声がけするという。「挨拶は相手を認めることです。なにごとも、そこから始まるのではないかと思います」

夏休みに、県内各地の小学生を知事室に招いて話をする「子ども知事室」というイベントがある。最近は、「私も将来知事になりたい」「女性初の首相になりたい」という女の子も出てきたという。「私のように専業主婦からでも政治家になったというモデルがいることで、若い人たちが『自分もできるんだ』と思ってくれる。生きたロールモデルであることを嬉しく思いますね」

◆2016年5月21日講義より

ダイバーシティは戦略だ

ダイバーシティを重要な経営戦略のひとつと位置付け、2012年より、経営陣による強力なリーダーシップのもと、全社をあげて推進してきた株式会社 LIXIL グループ（以下 LIXIL）。2015年には「女性が輝く先進企業」の内閣府特命担当大臣賞を受賞。2015年にダイバーシティ経営企業経営100選にも選ばれるなど、スピード感のある成果を上げている。同社のダイバーシティに貢献してきた、執行役副社長・人事総務担当の八木洋介氏に、改革の全貌を聞いた。

株式会社LIXILグループ　執行役副社長　人事総務担当
八木洋介さん

［プロフィール］　京都出身。京都大学経済学部卒業。NKK（のちのJFEスチール）、ゼネラルエレクトリック（GE）本社、GEメディカルシステムズ・アジア、GEメモリー・アジア、日本GEを経て 2012 年に LIXIL に入社。現在に至る。

全社あげてのダイバーシティへの取り組み

LIXILは、ユニットバス、キッチン、窓サッシなど、家に関するあらゆるものを扱い、そのほとんどで国内シェアNO.1を誇る総合住生活企業です。

もともとは、国内を主な市場としていましたが、この4年で急速なグローバル化を図り、5年前には500億円に過ぎなかった海外での売上が、今や6千～7千億円に。トータルでは売上1兆8千億円の企業に成長しました。（資料①）

急成長の背景には、全社をあげてのダイバーシティへの取り組みがあります。

なぜダイバーシティが必要か

内閣府の調査によると、男性と女性の学業成績を比較すると小中高大、すべての段階において女性のほうが優秀だという結果が出ています。それなのに、どうして企業は男性しか活用しないのでしょうか。

今、日本の労働人口は約6600万人。そのうち800万人は45～54歳のいわゆる「おじさん」です。約8人に1人のおじさんが実権を握っているのが日本の現状です。しかしこれで、グローバル競争に勝てるでしょうか。

今の若い人は、ダイバーシティに取り組んでいない会社には、女性だけでなく男性も入りたいとは思いません。フェアで、よいことをやる会社にこそ入りたいと思っています。よい人材を集めるためにも、ダイバーシティに取り組むことは意義があるのです。（資料②）

数値目標を明確にしスピード感を持って取り組む

LIXILで扱う商品やサービスのディシジョンメーカーは、ほとんどが女性です。にもかかわらず、2012年時点では、開発の現場に女性はほとんどいない。女性管理職は、全管理職中わずか0・9%でした。

活力があり創造性に満ちた強い会社にしていくために、まずは社員の約25%を占める女性の活躍が必要不可欠であると考え、2012年4月に「ダイバーシティ推進室」を設置。2013年には「LIXIL

資料❶ One LIXIL– 真のグローバル企業へ

資料❷ Diversityを活用することの重要性

●Diversity活用の利点

- ■採用における幅広く、より優秀なリソース確保
- ■活用できるスキルとそのプールの広がり
- ■多様化した顧客のニーズへの対応
- ■壁を作らない行動の促進
- ■効果的でチームワークのある集団形成
- ■エネジャイジングなカルチャーの形成
- ■イマジネーションと創造力の促進
- ■社員のモラル向上
- ■生産性の向上
- ■多様な集団間の健全な競争
- ■相互刺激による行動の促進
- ■相互監視による正しい行動の促進、間違った行動

→

- ■魅力ある会社
- ■活力・元気のある会社
- ■楽しい会社
- ■誇れる会社
- ■可能性を感じる会社
- ■お金を投資してみたい会社
- ■働いてみたい会社
- ■成長力のある会社
- ■変化を引き起こす会社
- ■スピード感あふれる会社
- ■強い会社
- ■面白い会社

●Diversityを活用しないコスト

- ■社員の退職
- ■優秀な人材の就職回避
- ■顧客・投資家からの低い評価
- ■低いプロダクティビティ
- ■低いモラル
- ■差別に対する不満
- ■不活性な組織
- ■ビジネス機会の喪失

Diversity宣言」を発表し、人事施策、人材育成、環境整備、風土醸成の4本柱で、具体的な取り組みを進めました。

2014年には、女性の管理職登用比率30%以上、新卒採用比率30%以上、リーダーシップ育成プログラム参加比率20%以上を目標に掲げました。その結果、4年間で、女性管理職比率は約7・4倍に、理系女性採用比率は36%までアップしました。このスピード感が大切です。

ガラスの天井は打ち破れ

しかし、いくら制度を整えても、女性のキャリアアップを阻む、ガラスの天井があるとはよく言われることです。私は、そんなものは打ち破れと女性たちに言っています。女性の視点を活かし、男性の弱みを見極めてその逆を行けば、必ず打ち破れると檄を飛ばしています。（資料③）

この4年間で、次々とガラスの天井を破った女性たちが出てきました。

アフリカで、トイレが汚くて学校に行きたくないという女の子に出会った女性は、現地との往復を繰り返しながら、JICAなどの社外機関と連携して、無水トイレの普及拡大に取り組んでいます。

ある女性は、女性をリーダーとするダイバーシティチームで業界初の「カーテンレール付窓枠」を開発しました。他にも、女性の住宅・サービス事業担当専務、新規事業開発室長、CCO、広報部長、海外内部統制部長、事業改革部長、ダイバーシティ推進室長など、たくさんの管理職が生まれています。（資料④）

これらの中には外部採用の女性もいますが、自社内で新人のうちから育成した女性の数がどんどん増えていくはずです。

成功のポイント

当社の取り組みが、内閣府はじめ、さまざまなところで評価をいただき、それがまた社内のモチベーションアップにつながりました。（資料⑤）

当社のダイバーシティの成功のポイントは、

① 強力なトップダウン
② 数値目標のコミットメント
③ スピード感のある実行力
④ 男性リーダーたちの協力
⑤ 女性リーダーの外部採用

その他、女性たちの自主的ネットワーク「LIXIL Women's Network」や、社長以下トップリーダーによる「ダイバーシティ・ミーティング」による風土の醸成も、成功のポイントでしょう。

しかし、何よりも女性たちが一連の取り組みを盛り上げてくれたことが大きかったと思います。よく、「管理職にしたいと思っても女性が嫌がる」という人がいますが、当社ではそのようなことはありませんでした。とにかく女性たちにがんばってもらい、後進のロールモデルとなってほしいですね。

LIXILでは、今後も、性別・国籍・バックグラウンドに関わりなく、優秀な人材を活用していきます。そして、「住生活産業におけるグローバルリーダーになる」という経営目標を達成していきたいと思っています。

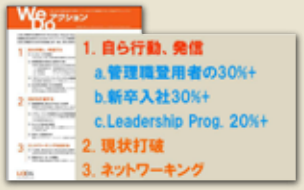
資料❸ ガラスの天井を破る… 女性の視点

■大局観、ダイナミックさ
■戦略思考
■圧倒的な実力
■火中の栗を拾う…問題解決/Close力
■自立、自律
■Comfort zone脱出
■甘えを捨てる
■一歩前に出る勇気・自信
■粘り強さ
■結果を出す
■ロールモデルから学ぶ
■認めてくれるリーダーを見つける
■有力なリーダーに実力を認めさせる
■転職… 会社を選びなおす

●男の弱さを強みに
■前例主義 vs. Innovation
■継続性重視 vs. 未来志向
■変化に弱い vs. 変革
■しがらみ vs. Challenge
■忖度 vs. Candid
■トップダウン型 vs. 発信
■独断的 vs. Listen
■権威に弱い vs. 当たり前を当たり前に
■秩序重視 vs. 正論
■リスク回避 vs. Risk-take
■受身で寡黙 vs. Outspoken
■希薄な世界観 vs. Global
■滅私奉公 vs. 公私のバランス

資料❹ Diversityの進展… ガラスの天井をなくす

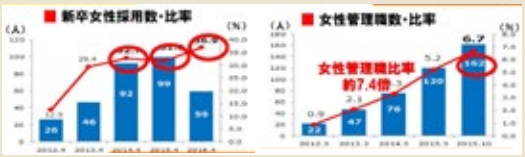
■トップのリーダーシップ



■人材育成
・MBA派遣者: 10/36人(28%)
・LT参加女性: 51人(23%)
・Six Sigmaリーダー: 62人(31%)

■風土醸成
・LIXIL Women's Network
・LIXIL Diversity Site
・Diversity Meeting

■人事施策: 登用、採用



▶リケ女比率:36% (2016年予定)

資料❺ 社外からの評価

■女性が輝く先進企業表彰

内閣府が、役員・管理職への女性登用に関する方針、取り組み、実績、情報開示において顕著な功績があった企業を選定し表彰するもの『内閣府特命担当大臣賞』を受賞

■「なでしこ銘柄選定」
経産省・東京証券取引所が共同で、女性人材の活躍を積極的に進めている企業を選定するもの。2年連続で選定

■「ダイバーシティ経営企業100選」
経産省がダイバーシティ経営によって企業価値向上を果たした企業を表彰するもの。2015年度 受賞

■子育てサポート認定企業「くるみん」マーク取得(2015年)

■日本HRチャレンジ大賞受賞

◆2016年6月18日講義より

歴史好き少年が最年少で市長になったわけ

阪神淡路大震災を経験し、インフラの大切さ、地方政治の意義に目覚めた熊谷さん。会社員経験を経て31歳のときに当時最年少の千葉市長となり、旧態依然とした市政の大改革に着手。多くの市民の支持を集め、現在2期目を務めている。

熊谷俊人（くまがいとしひと）さん

［プロフィール］ 兵庫県出身。早稲田大学政治経済学部を卒業後、NTTコミュニケーションズ株式会社に入社。平成18年にNPO法人政策学校「一新塾」で政治を学び、19年に市議会議員に当選。21年には千葉市長に。25年に再当選し、現在2期目。趣味は、登山、詩吟、歴史、バドミントン、テニス、卓球。

歴史と政治はつながっている

28歳で会社を退職し、31歳のとき千葉市長に。当時は最年少でした。政令指定都市の中では今でも最年少です。普通の会社員の家に育った私がなぜ政治の世界に入ったかをお話ししたいと思います。

物心ついた頃から歴史が大好きでした。明治、大正、昭和と勉強していくと、最後は現代政治の話になってくる。今の政治もいずれ歴史になる。歴史と政治はどこかでつながっている。そのような流れの中で、政治への関心が高まり、中学の頃には、新聞の全国紙を全部読み、土日は朝から政治の討論番組をはしごして見るくらい政治好きになっていました。

歴史には転換点があります。転換点の中で、われわれの国、諸外国の将来が決まっていく。つまり、歴史は転換点における選択の繰り返しなのです。為政者がどのような選択をするかで国民の人生が変わっていく。であれば、よりよい選択をすることが政治を行う人の責任ではないか、と考えるようになっていました。でも、かといって、まさか自分が政治家になれるとは思っていませんでした。

阪神淡路大震災で気づいたこと

高校時代にその考えが大きく変わりました。当時神戸に住んでいた私は、阪神淡路大震災に直面することになりました。家は地盤の固いところにあったので大した被害はなかったのですが、水、電気、ガスといったライフラインがすべて止まりました。それによって、今までいかに便利に暮らせていたかを思い知りました。

電気、水道、ガスの順に復旧しましたが、このとき以来、自分の足元がどうなっているのかを意識するようになりました。

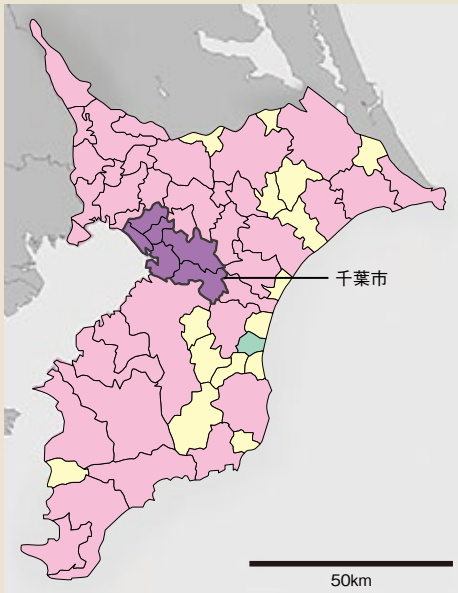
また、以前は、政治＝国政だと思っていました。でも、震災の後、たとえば狭隘道路の地域は火事の被害が大きいなど地域の状況を目の当たりにしたことによって、都市計画の大切さを知りました。また、自分が何気なく住んでいる町が、すべて行政によって都市計画されたものであることに気づきました。

災害のときには、県の危機管理能力や、知事の知識、決断力、法整備などがいかに大事かにも気づきました。このときに、地方行政には遅れている分野がある、私は国政ではなく、地方政治をやりたいと心から思いました。

政治家への前段階として社会人経験を積む

政治に強い関心を持ち始めたものの、いきなり政治家になろうとしたわけではありません。まず資金が必要だと思いました。また民間企業での就業経験があったほうがいいと思いました。さらに、私が就職活動をしていた当時は、インターネット革命の時代でした。中学生の頃からパソコン通信をやっていた私は、インターネットがこれから社会を変える、この世界に一度身を投じてみたいと思っていました。ソフトウエアやサービスの分野ではなく、インフラに関心があったことから、NTTコミュニケーションズ株式会社に就職を決めました。

ここでは、企画や財務などさまざまな仕事を経験し、企業買収にも関わらせていただきました。入社して4年が過ぎた頃、「大企業しか知らない。ベンチャーのことも知りたい」と思い、買収した元ソフトバンク系列の企業に出向を願い出ました。NTTと全く違う柔軟な企業風土や、社員一人ひとりのハ



面積:271.76km²
総人口:974,271人(推計人口、2016年8月1日)
財政:
平成27年度決算 歳入 3,924億円、歳出 3,848億円
平成28年度 一般会計予算4,004億円
(前年比102億円(2.6%)増)

ングリー精神に、とても刺激をいただきました。

挑戦するなら20代！出馬を決意

社会人になって6年目。私は28歳になっていました。仕事が楽しくなってきた頃です。そのときに4年に一度の統一地方選挙がありました。政治への関心はまだ消えてはいませんでした。今、挑戦すれば20代だが、次だと30代半ば近くになる。会社の中でも責任のあるポストに就いて、結婚したり子どもがいるかもしれない。そうなると挑戦しづらい。

私は人生を逆算して考えるタイプです。自分が死ぬときに、政治に挑戦しないままだったら絶対後悔するだろう、たとえ失敗したとしても、一度はどこかで挑戦しなければ。

そう考えて、一新塾に入塾しました。

この頃、元上司の知人で千葉一区の衆議院議員を紹介してもらい、政治家になりたいなら、公募に応募したらいいと教えられました。応募するとわずか5分の面接で合格。統一選挙に出馬することになりました。あとでわかったことですが、地方選挙では応募が少なく、意外にハードルは低いのです。

りっぱな政策だけでは当選できないと知る

大学時代に、親のつてを頼って、県議会議員に会ったことがあります。このときに、「同窓会では何か役員をしているのか?」「大学ではサークル活動をしているのか?」と聞かれ何もないと答えると「じゃあ、お前は一体、何の票を持っているのだ」とあきれられたのですが、このときに私は、政治家という職業の何たるかを知った気がしました。いくらりっぱな政策を掲げても票が集められなければ政治家にはなれないのです。

さて、選挙に出馬すると決意した私は、会社を辞めることにしました。いい会社でしたし未練はありました。選挙に落ちても戻れません。余談ですが、海外では、地方政治であれば会社に籍を置きながら政治家になることができますが日本ではできません。政治家は片道切符と言われますが、戻るところがなければ、志があっても政治家を志すのは大変難しいと思います。しかも供託金の50万円を用立てなければ選挙に出ることができません。このような仕組みがあるのは日本くらいです。

選挙活動で知った女性のチカラ

私は兵庫県で生まれ育ち、千葉県の地盤がなく、選挙には不安がありました。選挙に勝つことができたのは親友のおかげです。彼は、私のために千葉県に引っ越しまでして応援してくれました。選挙活動中は、よく彼の家に泊めてもらいましたし精神的にも支えてもらいました。

演説で、女性と男性の違いを思い知ることになりました。演説をしていると、男性はよく話しかけてきたり質問をしてくれ「票入れるよ」とも言ってくれますが、その場限りのことが多い。ところが女性たちは、いいと思ったら徹底的に応援してくれる。一票どころか、仲間を連れてきてくれたり、口コミで広げてくれたりする。何より女性がいると活気が出て事務所の雰囲気がよくなる。若い人たちも集まりやすくなる。女性のパワーには大変助けられました。

私は、今、選挙権を持っていない小さい子たちにも、政治について考えてほしくて、積極的に話しかけたりビラを配ったりしていました。すると、お母さんがたから、「うちの子に、熊谷に一票入れてと言われた」とか「選挙の翌朝一番に、うちの子が熊谷は勝った?と聞いてきた」などの声が聞こえてきました。別に票がほしくてしたわけではなかったのですが、信念を持っていれば子どもたちにも伝わるのだと思いました。

最年少で市長に当選 大胆な改革を

結果は1位当選でした。千葉県出身ではないのになぜ千葉市で出馬したのか。地方政治がしたかったからです。また、千葉市が政令指定都市であったからです。県では政策を実行するのは市町村になるが、市町村では人もお金もない。政令指定都市なら、

人も予算もノウハウもある。自分たちで政策を決め実施もできる。自らの手で改革ができるのです。

市議会選に当選した2年後、31歳のときに、千葉市長に当選しました。千葉市では初めての民間出身の市長となりました。

就任して最初の大きな仕事は政令指定都市でワースト1だった赤字財政の改善でした。平成22年には1兆815億円だった市債残高を、平成27年には1兆181億円にまで削減。引き続き、財政の健全化に努めています。

次に行ったのは、トライ＆エラーを奨励する風土への改革です。行政はエラーをすると議会で叩かれるので新しいチャレンジがしづらい。しかしこれでは世の中は変わりません。今、千葉市では、どんどんトライをし、エラーをしたらやり直す、ということができるようになりました。意思決定も迅速になってきました。民間企業なら当たり前のことです。

世の中は必ず変えられる

世の中をよくする方法は、わかっています。われわれがするべきことは社会の不当な不利益を正すこと。行政にはさまざまな問題がありますが、システムを変えれば改善できる。原因を解明し、小さな問題を一つひとつ改善していくことが大事です。

成果は出ています。ワースト1だった財政も順調に再建することができました。待機児童も2年連続0人を達成しました。千葉市への企業誘致も増えています。

行政は、できない理由がわかりやすい。それを改善すると世の中はよくなります。それをするために私たちが存在するのです。政治は変えられます。「やればできるんだ」「私も政治に参加しようかな」と思う人が増えてくれればやっていてよかったなと思いますね。

千葉市の公式サイト

千葉市は、千葉県の県庁所在地。政令指定都市および、業務核都市に指定されている。東京都心から約40km離れた千葉県中心部にあり、中央区、花見川区、稲毛区、若葉区、緑区、美浜区に分かれている。全国で13番目に人口が多く、公共交通網が発達している一方、豊かな自然や農地も多く残っている。

■千葉市の最近の取り組み

省　エ　ネ: 他市に先駆けて市内の道路照明灯などをLED化。CO^2削減量は年間11,890トン、電気料金は、年間約4億円の削減が見込まれている。

高齢化対策: 高齢者の相談所「あんしんケアセンター」（地域包括支援センター）増設、認知症などについて相談できる「認知症疾患医療センター」、在宅介護者を支援する「家族介護者支援センター」を開設。介護支援ボランティア制度の創設など。

そのほか、市債残高の削減による財政の健全化、駅前開発による活性化、ワンストップ窓口設置による市民サービスの向上、子育て支援、子どもの貧困対策等に積極的に取り組んでいる。

赤松政経塾 参加者の声

世界を見据えた女性リーダーに

編集者

伊集院妃芳さん

昨年、アメリカのシリコンバレーにて、現地で世界中から集う女性起業家の養成プログラムを運営する企業で働き、女性起業家に必要な能力を学びました。勤務先の社長と女性に関する考えを毎晩討論するうちに、日本の女性活躍の遅れや、「本当の男女平等とは何か」に興味を持ち、今回、赤松政経塾に女性の活躍の現状を学ぶ機会の一つとして参加を決めました。本塾の講演はもちろん、多方面で活躍される女性に会い、刺激を受けています。世界を見据えた女性リーダーになるため、有意義な時間にしたいです。

女性の健康問題を解決するためにも女性政治家が必要

医療ジャーナリスト

増田美加さん

女性医療とヘルスケア分野で仕事をして30年。男性向けの医療や薬剤は国にすぐ承認されるのに、女性の健康問題は常に後回しにされる現状を目の当たりにしてきました。情報発信でこの現実が変わればと長年様々な活動をしてきました。しかし、男性中心の世の中を動かすには、最後は政治の力が必要と実感。クオータ制の実現に向け政治家を目指す女性を応援したいと参加しました。「私には私のできることを！」健康問題の側面から、女性が真に活躍できる社会の実現に向けて声を上げ続けたいと思います。

ともに学び社会をよくしたい

一般企業勤務

中村由美さん

「あらゆる場でリーダーを目指す女性を育成する」。ここに魅せられました。以前勤めた会社は男性社会で女性は結婚後退職が常識でした。今の会社は女性が多く育児休業や時短制度が充実していて役員にも女性が抜擢され活躍しています。しかし私が子どもを預けてまでしている仕事は誰の何の役に立っているのか。仕事の代わりはいても母親は私しかいない。悩んでいたある日、赤松政経塾と出会いました。魅力あふれる女性が集い、ともに学び、社会をよくしたいという共通の夢を語り合えるすばらしい場だと思います。

様々な課題解決の糸口は女性の活躍

鴻巣市議会議員 2 期

頓所澄江（とんしょ）さん

20余年、福祉・介護現場で培った経験を活かし、高齢者になっても要介護になっても生きがいや役割をもって生活できる地域づくりの一翼を担いたいと、市議会議員になりました。視野を広げ見識を深めるために赤松政経塾に参加しました。

日頃聞く機会が少ない国会議員の講義や各界で活躍する女性リーダーの経験と知識に基づく講義は、内容が濃く大変参考になりました。急速に進む人口減少と高齢社会、その課題解決の糸口は女性の活躍だと思います。みなさん、力を合わせてがんばりましょう。

取材・文：石井栄子（CDA認定キャリア・デベロップメント・アドバイザー）